

# のめり込む情熱 自主製作映画に

来月19日「あの群青の向こうへ」上映

松本市で毎年開く短編映画コンテスト「商店街映画祭」から始まった。

「あの群青の向こうへ」。心にモヤモヤしたものを抱える人の背中を押すような青春ロードムービーだ。監督・脚本は同市松原出身の廣賢一郎さん(24、川崎市)。21歳の時に自主製作した。映画づくり未経験の友人らの協力を得て、人生を懸けて作り上げた渾身(こんしん)

ん)の一作。複数の映画祭にノミネートされ、1月には東京・渋谷のミニシアターで念願の劇場公開を果たした。高校生時代、商店街映画祭に出品し、14年には進ヶランプリを受賞した。「今の僕があ

るのは、この街のおかげ。絶対に松本で上映したかった」映画づくりの原点となった松本。4月、故郷で念願の上映を果たす。(松尾尚久)

03面に続く

松本の駅前大通りに立つ廣さん。高校時代、市内のあちこちで撮影しました



地域 Local News

## 松本の「商店街映画祭」が原点

クローズアップ (01面から続く)

映画監督

廣賢一郎さん

松本市出身

「あの群青の向こうへ」は、自分のために撮ったんです。廣賢一郎さんはそう切り出した。製作前、僕は後悔や絶望、不安の中にいて、自分がプロの映画監督になれるとは思わずにいました」

その思いをはねのけるように必死で走って作った映画には、作り手の切実な思いがそのまま投影されている。未熟で不器用な作品だけど、ずっと大切にしていきたい。この作品を作ったことで僕は大人になれたし、次へ進めたんです」

廣賢一郎さんは、中学生の時に衛星放送で見たハリウッド映画「フォレストガンプ」/一期一会に感激。以降、両親の就寝後や外出時を見計らい、衛星放送で流れる映画をジャンル問わず見まくった。

こんな作品が見たい、自分だったらどう撮る。いつしかデジタルカメラで動画を撮影するようになった。松本深志高校時代には三脚にデジタルを取り付け、授業風景を撮影したこともある。

「将来ハリウッドで撮りたい。米国に住んでみよう」と、高校生の時、テレビCMで女優の羊生悠さんを見て「主演はこの人だ」と直感すると、所属事務所へ直談判し、出演を取り付けた。コンピュターグラフィックス(CG)の専門学校に通

「あの群青の向こうへ」は、劇中にCGを取り入れた。製作に200万円余を投じたが、映画が公開される保証はどこにもない。「公開できなかったら協力してくれた仲間顔向けできない。ロケした松本、大阪、東京では上映したいと必死だった」

作品は18年にさまざまな映画祭にノミネートされて注目を浴び、劇場公開へ。渋谷と松本のほか、大阪や京都などでも上映が予定されている。

「松本の商店街映画祭がなければ、今の僕はあ

りません」と廣さんは言い切る。当時、松本の中心部では映画館がほぼ姿を消していた。友達に映画好きが一人もいなかった。映画祭で出会った人たちは、そんな孤独感から僕を救ってくれました。なにより、自分の撮った作品がスクリーンに映ることがうれしかった。

廣さんは今、ミュージックビデオやCMの映像ディレクターとして生計を立てている。多忙な中でも次回作の脚本を執筆し、映画製作の機会をうかがう。

◇

「サスペンス要素を入れた人間ドラマを書いていきます。セブンのようなデビッド・フィンチャー監督が大好きなんです。そういう顔は、松本でデジタルカメラを回していたころの映画少年の顔に戻っていた。



撮影現場で役者やスタッフと打ち合わせる廣さん(右から2人目)

「あの群青の向こうへ」の一場面



メモ

【あの群青の向こうへ】「未来の自分から1通だけ『ブルーメール』と呼ばれる手紙が届く世界」を舞台にした物語。羊生悠さん演じる家出少女ユキと、中山優輝さん演じる心に傷を負った青年カガリが、さまざまな人と出会いながら東京を目指す。4月19日午前11時から、まつもと市民芸術館(深志3)で上映。廣監督のアフタートークも。前売り券と高校・大学生は1400円、一般当日券は1800円。松本シネマセレクト ☎98・4928